

氏名	板垣 武尊 ^{いたがき たける}
学位の種類	博士（観光学）
報告番号	甲第479号
学位授与年月日	2018年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	中国雲南省元陽におけるバックパッカー向け宿泊施設の変化
審査委員	(主査) 杜 国慶 (立教大学大学院観光学研究科教授) 佐藤 大祐 (立教大学大学院観光学研究科教授) 松村 公明 (立教大学大学院観光学研究科教授) 松村 嘉久 (阪南大学大学院企業情報研究科教授)

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

図一覧

表一覧

写真一覧

要約

I はじめに

1. 先行研究と研究課題

- 1) 途上国周縁地域の観光産業の研究
- 2) BP とその研究課題
- 3) 途上国棚田観光地の研究

2. 研究の枠組み

- 1) 研究目的と方法
- 2) 研究の手順
- 3) 研究対象地域

II アジアにおける BP 観光の展開

1. BP 観光とアジアでの拡大

- 1) アジア横断型のヒッピー・トレイル
- 2) 東南アジアルートの開拓
- 3) 中国雲南省への進出

2. BP による元陽の発見と新街鎮のエンクレーブ化

III 元陽における BP の属性変化と観光行動

1. 観光者の属性変化

- 1) MT の増加と少数民族の宿泊業参入
- 2) 世界遺産登録と FP の流入

2. BP の観光行動

- 1) 出身地域
- 2) ミクロスケールでの観光行動
 - i. 元陽到着前後の訪問地
 - ii. 宿泊施設の選択方法
 - iii. 元陽での滞在と観光行動

IV 元陽における宿泊施設の展開と運営方策

1. 宿泊施設の立地変化

- 1) BP の到来による新街鎮への集積と勝村への波及

- 2) MT 増加に伴う多依樹元坪道路沿いへの移動
- 3) FP 化に伴う普高老寨・黄草嶺への集積
- 2. 宿泊施設の経営者属性と運営
 - 1) 棚田保有状況と宿泊施設の展開
 - 2) FP 向け宿泊施設の設備とサービスの充実
 - 3) 多依樹における FP 向け宿泊施設の立地と棚田景観の演出
 - i. 棚田眼前先駆型
 - ii. 集落入口後発型
 - iii. 棚田眼前高級指向型
- 3. BP 向け宿泊施設の運営手法の革新
 - 1) 予約サイトへの対応
 - 2) 宿泊者の口コミ評価
 - i. 英語口コミ
 - ii. 中国語口コミ
 - iii. 外国人 BP と中国人 BP の棲み分け

V 結論：BP 向け宿泊施設の変容メカニズム

参考文献

索引

謝辞

(2) 論文の内容要旨

途上国の周縁地域ではバックパッカー（以下 BP）によって観光資源が発見されてきたが、現在ではマストゥーリスト（以下 MT）も流入し、BP もフラッシュパッカー（以下 FP）化してきている。ところが、途上国周縁地域では観光地化の担い手たる宿泊施設経営者の出身民族に基づく伝統的生業や外部世界との繋がりやの分析が不可欠であるにも関わらず、BP の FP 化という現代的な課題については BP 向け宿泊施設の質的变化のみが報告されている。

中国雲南省元陽でも近年急速に進みつつある BP の FP 化には、外部出身者である漢民族が運営手法の革新を伴った宿泊施設を開設して対応している。そこで本研究は、中国雲南省元陽において、BP 向け宿泊経営者の民族や経歴を考察したうえで、新たな運営手法の導入を分析し、さらに宿泊者の宿泊施設選択基準の変化を踏まえて、BP の FP 化に伴う宿泊施設の変化を解明することを目的とする。なお、2013年の世界遺産登録に伴う MT の急増には、政府による棚田保護政策によって耕作が義務付けられた少数民族が自宅を改造し対応している。この MT 向け宿泊施設を比較対象として同時に分析することで、BP・FP 向け宿泊施設の独自性を浮かび上がらせていく。

以上の目的を達成するために、2009年8月、2011年2-3月と8-9月、2014年5-7月、

2015年12月-2016年1月に複数回に分けて現地調査を行った。宿泊施設と観光施設（観光村・有料展望台）、棚田、村落の分布および土地利用（新街鎮・多依樹）を把握するために、歩測およびGoogle Earth衛星画像、旧ソ連製10万分の1地形図「ЮАНЬЯН」（1978年発行）、百度地図の判読などの手法を用いた。

元陽における宿泊施設および旅行会社からの経営や利用者に関する聞き取り調査は、2011年2-3月と8-9月、2014年5-7月、2015年12月-2016年1月に本格的な聞き取り訪問時期については、元陽にあるBP向け旅行会社の顧客情報を分析したうえで、詳細な調査は2011年8月、2015年12月に実施したBPおよびBP向けガイドからの聞き取り調査や滞在中の参与観察によって補足した。また、予約サイトに掲載された宿泊施設の口コミを、テキストマイニングソフトであるKH Coderを利用して分析した。

1960-70年代には、ヨーロッパからインドおよびネパールを目指すヒッピー・トレイルと呼ばれるルートが存在していた。1970年代後半以降、情勢不安からアジア横断型のヒッピー・トレイルの踏破が困難になると、BPの目的地は東南アジアに変遷した。

雲南省の辺境地域は1980年代から90年代にかけてBPによって発見された。2005年以降は、国内観光者に続き外国人観光者数も急増し続け、BPが発見した周縁地域にもMTが流入するようになる。このように伝統的なBPの目的地にMTが流入すると、観光地化を嫌ったBPは目的地をさらに奥地へと求め、結果として周縁地域は拡大していく。

元陽は1992年に外国人に開放されると、カメラマンとBPが元陽を訪れるようになった。BPは新街鎮のバスターミナルに到着後、近接する新街鎮中心部のBP向け宿泊施設を利用していた。新街鎮中心部のBP向け宿泊施設経営者は元陽県の人口の5%にしか過ぎない漢族で、1949年の中国建国以降に移住してきた者や、1988-89年に新街鎮で発生した土砂崩れによって移住してきた者が中心となっている。彼らは自宅を改造することで宿泊施設の開設に乗り出し、バスターミナル到着後に宿泊施設を探すBPを対象に集客した。この時期に、バスターミナルを中軸とした新街鎮中心部に地元出身の漢族が経営するBP向け宿泊施設が集積しはじめ、新街鎮に小規模なバックパッカー・エンクレーブが形成された。

2000年代に入ると、元陽は国内外のメディアの大きな注目を集めるようになり、MTが増加した。その後到来したMTの入り込みは棚田に水が張られて美しくなる農閑期の2-4月に集中し、その期間だけ営業する少数民族経営の宿泊施設が勝村や棚田に近接する多依樹道路沿いに集積した。

さらに2013年に元陽の棚田が世界遺産に登録されると、元陽の観光地整備が進んだ。一方で、世界的な潮流として2010年以降BPのFP化が進行し、元陽にも2013年からFPが到来し、さらに中国人BPも増加してきた。その結果、普高老寨にFP向け宿泊施設が開設された。FP向けの宿泊施設経営者は、大多数が外部地域出身の漢族で、前職で有名な観光地の大理や麗江においてBP向け産業に従事していた者や、BP旅行の経験がある者などによって構成される。加えて、宿泊施設の立地と提供される設備・サービスなどが変化したことによって元陽におけるBPの観光行動も変化した。

元陽の棚田は政府の規制もあって観光地化した後も荒廃することなく、農業が持続的に営まれている。地元の少数民族が棚田耕作を放棄せず宿泊施設経営に参入できた要因は、MTの季節性が農閑期と一致していたためである。一方で、年間を通じて入り込みのあるBP向け宿泊施設は元陽出身の漢族に、FP向け宿泊施設は外部出身の漢族によって経営されている。このような、観光者の季節性と経営者の民族の棲み分けによって、地元住民は棚田農業を維持しながら宿泊施設経営に参入することもできた。

BPは安価で快適水準の低い宿泊施設を好むとされていたが、近年、BPのFP化に伴い様々な設備やサービスが要求されることが指摘されている。新街鎮中心部におけるBP宿泊施設ではオンライン予約に対応しているものはなく、Wi-Fiや食事の提供、英語対応、観光ガイドの整備も進んでいない一方で、多依樹における大多数のBP向け宿泊施設では、これらの設備やサービスが提供されている。BP向け宿泊施設で提供される設備・サービスの充実度が、新街鎮と多依樹で大きく異なる理由としては、宿泊施設経営者のBPに対する知識量や、過去の経験などによると考えられる。

多依樹におけるFP向け宿泊施設は、開業年次、集落での立地、宿泊施設の景観演出などによって「棚田眼前先駆型」と「集落入口後発型」、「棚田眼前高級志向型」、「その他」に分類できる。棚田眼前先駆型は、棚田眼前という立地特性を生かした景観演出に加え、外観はハニ族の伝統的家屋の景観を忠実に再現しており、内観では経営者自らの民族に基づく民族文化が呈示されていることに特徴がある。集落入口後発型は棚田景観の眺望には適していないため、安価な部屋の設置やBP、FPを主題とした内観や備品を充実させていることで利用者を集めている。棚田眼前高級志向型の宿泊料金は高値に設定されており、巨大窓ガラスやバルコニーなど棚田景観を鑑賞するのに適した設備が施されている。加えて、内観では経営者の趣向に基づく高級感が演出されている。

宿泊施設の口コミによれば、多依樹におけるFP向け宿泊施設の評価は、外国人FPや中国人BP共に、経営者、食事のサービス、立地、棚田景観などの要素が挙げられている。経営者に関しては、BP旅行やBP観光産業に従事した経歴などを背景とした人柄やホスピタリティが評価されていた。そして外国人FPには、英語能力が評価されていた。このため、経営者の英語力によって外国人BPと中国人BPは棲み分けられている。また、宿泊施設の立地と客室からの景観も重要視されている。特に高級志向のFPは、宿泊施設の客室からの眺望を重要視し、棚田眼前に位置し棚田景観の演出が施された高級志向型の宿泊施設を好んでいた。

元陽におけるBP向け宿泊施設の変化は、BPのFP化、経営者の能力や経歴、観光資源となる棚田の立地など多数の要因に基づいていると考えられる。

1992年対外開放以降、新街鎮中心部に小規模なバックパッカー・エンクレーブが形成された要因は、バスターミナルとの近接性である。その後、多依樹にFP向けの宿泊施設が集積するようになった要因は次のようにまとめられる。第一に2013年の世界遺産登録に伴う交通アクセスの向上、第二にBPのFP化、が挙げられる。

元陽における BP 向け宿泊施設は、MT 向け宿泊施設と棲み分けながら独自の発展を遂げてきた。加えて、2013 年以降の BP の FP 化に伴い BP 向け宿泊施設も変化してきた。本研究ではその変容メカニズムを、立地変化、経営者の経歴、棚田景観を中心とした内観の演出、利用者の口コミ分析から分析することで解明する。また、実際に旅行者への聞き取り調査を行うことで、BP の FP 化や宿泊施設の変化に伴う観光行動の変化についても明らかにする。

途上国周縁地域は BP に観光の目的地として発見された。そして、その後の BP の FP 化に伴い、他地域出身の元 BP や BP 向け観光産業の従事者によって FP 向け宿泊施設経営の目的地として発見された。このように、BP の FP 化および BP 向け宿泊施設の変化は、元陽のような一見すると MT が優勢の観光地においても起きている。したがって、途上国周縁地域における観光地を研究する際には、観光地の発展段階に関わらずその観光地を発見した BP は無視できない存在であり、BP と FP の実態や変化についても分析する必要がある。

II. 論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

本論文は中国雲南省元陽におけるバックパッカーのフラッシュパッカー化に伴う宿泊施設の変化の解明を目的としたものである。この目的を達成するために、申請者は2009年から2016年にかけて合わせて1年間に及ぶ詳細な現地調査を実施した。調査で得られた1次資料を用いて、バックパッカー向け宿泊施設の立地、経営者の民族や経歴、バックパッカーの宿泊施設選択基準の変化とそれに対応した施設運営手法の導入などを分析した。1992年の対外開放をきっかけにバックパッカー・エンクレーブが形成されたのはバスターミナルに隣接する新街鎮中心部であったが、その後2013年の世界遺産登録に伴う交通アクセス改善とフラッシュパッカー化を背景に、フラッシュパッカー向け宿泊施設が多依樹に集積した。多依樹の中でも棚田に隣接して立地する宿泊施設は、ハニ族伝統家屋の外観の再現のみならず、施設内には棚田観賞に適した設備と高級感の演出が施され、経営者・スタッフの語学力と合わせて高級志向のフラッシュパッカーに対応していた。このような外国人フラッシュパッカー向け宿泊施設は外部出身の漢族経営者によって運営手法が工夫されており、地元の少数民族が経営する中国人マス・ツーリスト向け宿泊施設とは運営手法の充実度と施設の立地においても対照的であった。このように、インターネット社会に根ざすフラッシュパッカーの出現により、彼らの要望に応えるため経験豊富な漢族によってなされる棚田景観演出等の新たな運営手法が、宿泊客属性や立地の点で宿泊施設経営の棲み分けを生じさせていた。本論文は以上のようなバックパッカー向け宿泊施設の変容メカニズムを解明した。

(2) 論文の評価

これまで、独特の観光関連産業の集積地であるバックパッカー・エンクレーブと、それが地域社会に与える影響がバックパッカー研究の中心であった。その中であって本論文はバックパッカーのフラッシュパッカー化に伴う宿泊施設の変化に着目した、観光地理学研究として最新の研究成果である。研究対象地の元陽は少数民族によって耕作されてきた棚田景観に特徴を有する世界文化遺産である。しかし本論文は、漢族を含めた外部出身者と彼らによる宿泊施設の立地再編や景観演出法の導入およびフラッシュパッカー受け入れに着目し、さらに少数民族によるマス・ツーリストの受け入れをも射程に入れており、この観光地の本質に迫った研究と言える。本論文により解明された宿泊施設の立地や経営主体、運営手法等の変容メカニズムやその分析手法は、途上国周縁地域のみならずフラッシュパッカー化する大都市内エンクレーブにも適用しうるものであり、今後の観光地理学研究にも有益である。さらに、情報制限に厳しい中国の内陸部という調査環境の制約を克服する

ため、多種多様な地図データを合わせて活用し、調査地で歩測によって情報収集したデータは独自性が高く、研究の価値を高めたことは本研究の評価すべき点として迫力がある。

審査会では、現地調査で得られた資料の活用や観光研究への貢献、政策との関連、中国語地名の読み方などの点とそれを踏まえた今後の課題が示されたが、これらは本論文の研究上の貢献を損なうものではなく、本論文の成果をより精緻化し発展させていく方向性をもつものと判断した。審査委員は、本申請論文の観光研究としての独自性と研究上の貢献を高く評価し、博士の学位に相当するとの見解で一致した。